た。そこで今朝の中はそれを盗まうと――左様です。辻強盗を働いて盗む事にかかつた。それから、午後はそれについて、わたしを非理に陥さうとした――わたしの方が、あなたの手紙を盗まうとしたやうに見せようとした――つまり凡べてが、わたしの卑劣、利己主義、それからあなたの善良、信心、犠牲的精神から出來たことのやうに見せようとした。それがイギリス人流だといふのです。

貴婦人。 馬鹿ばつかり。わたくしにはちつともイギリス人流な所はございませんからね。イギリス人なんて

間ぬけな國民ですよ。

ナポオレオン。 さう、時々、いつ自分達がひどい目に逢ふか分らない間抜な所もありますね。して見るとなる程あなたの頭腦はイギリス流ぢやあないな。それは認めるが、ぢやああなたの祖父さんはイギリス人でも、あなたの祖母さんは――何んだらう？佛蘭西人かな？

貴婦人。 いいえ、アイルランドですよ。

ナポオレオン（口早に）。アイルランド！（考へて）。なる程、私はアイルランドといふものを忘れてゐた。イギリスの軍隊がアイルランドの大將に率ゐられる。フランス

の軍隊がイタリイの大將に率ゐられる。好い取組だ。

（言ひ止めてまた半冗談に、半ば憂はしげに）。兎に角、あなたはわたしに勝つた。始めに勝つと、お終ひまで勝ちだ。

（冥想的に月光に照らされた葡萄園の中を歩み、空を仰ぐ。女もそつと跡からついて行く。彼女は夜の美に打たれ、且つ薄闇に大膽となり、男の肩に手をのせる）。

貴婦人（柔かに）。あなた何にを眺めてゐらつしやるの？

ナポオレオン（天を指さし）。わたしの星を。

貴婦人。あなたはそれを信じてゐらつしやるの？

ナポオレオン。信じますとも。（二人は暫時星を眺める、女はや

や男の肩によりかかるやうにする）。

貴婦人。イギリス人は男の星といふものは女の襪の紐がなくつては完全でないといふやうな事をいひますが、あなた御存じ？

ナポオレオン（威嚴を傷けられ——匆々女を拂ひのけ室の中へ戻る）。馬鹿な！僞善者だ！フランスの人間がそんなことを言つたら、神を畏れてみんな手をあげなくてはならん！（奥の室へ入り、開けひろげて怒鳴る）。おい、おい、亭主。燈火はどうしたんだ。（テエブルと食器棚の間に來り、椅子を自分のと並べて隣のテエブルの前へやる）。まだ手紙を燒く用

があつた。（手紙の束を取上げる。亭主、蒼い顔をしてまだ震へ乍ら、燭臺に二本蠟燭をつけたものを片手に、幅のひろい心切盆を片手に持つて出て來る。）

亭主（燈火をテエブルの上に置き、情ない調子で）。閣下、只今は何にをごらんでしたか――外で？（肩越に葡萄園を指す、併し恐くつて四邊を十分見廻す事は出來ぬ）。

ナポオレオン（手紙の束を解き乍ら）。それがどうしたのだ？

亭主（吃り乍ら）。魔法使の女がいつの間にやら行つて――消えてしまひましたから。しかも誰一人出て行く姿を見た者はないのでございます。

貴婦人（葡萄園から亭主のうしろに現はれて）。わたし達は、あの女がお前さんの處の箒の柄にのつて、月の世界へ天上する後姿を見てゐたんだよ。もうあの女は二度と出て來やしないから。

亭主。ジエス　マリア！（十字を切つて駈けて出る）。

ナポオレオン（山なす手紙をテエブルの上に投出し乍ら）。さあ。（テエブルに向ひ今し方置いた椅子に坐す）。

貴婦人。ええ、でもあなたはかくしに、まだ例の手紙を入れてゐらつしやるでせう。（ナポオレオン微笑する、ポケットから一通の手紙を出し紙束の山の上に投る。女はこれを

取上げ男の顔を見て)。シイザアの妻はいかが？

ナポオレオン。 シイザアの妻は疑惑以上のものです。燒いて下さい。

貴婦人（心切を取上げこれに手紙を挾んで蠟燭の炎にかざす）。でもシイザアの妻も、ここに二人、かうしてゐるのを見たら疑惑以上でゐられるでせうか！怪しいものねえ！

ナポオレオン（臂をテエブルに持たせ、兩手に腮をのせて、手紙を眺め乍らあふむ返しに）。怪しいものだな！

（妙な貴婦人は手紙を心切盆の上に載せて、ナポオレオンの側に

座し、ナポオレオンと同じ姿勢で、臂をテエブルの上にもたせ、兩手に腮をのせて手紙の燒けるのを眺めてゐる。やがて燒け果てると、兩人同時に眼を反らして見合ふ。その時幕靜かに下つて兩人の姿を隱す）。

——終——

熱　風（サムウム）

アウグスト　ストリントベルク

人物

ビスクラ　アラビアの少女

ユウセフ　その情人。（アラビアの青年）

ギイマアル　フランス●ヅワアヴ隊（アラビア風の服装せる

フランス軍隊の中尉）

場所は――アルジイル（北アフリカ佛領アルジエリアの港）。

時は――現今。

舞臺面

アラビア風のマラブウ(墓室)、中央地上に石棺を置く。ここかしこに祈禱者のために毛氈をしき、右手の隅には納骨堂。奥には扉あり、帷幕を垂る。奥の壁には幾つかの窓を穿つ。地上にはここかしこに小さき盛砂の山、引きちぎられたる蘆荻、椰子の葉、アルファ草など積み重れあり。

第一景

少女ビスクラ、プルヌス頭巾(アラビア風の頭巾の付いたマントやうのもの)を被り、ギタラ(六絃琴)を背負ひて出づ。毛氈の上に身を打伏し、兩腕を胸に組みつゝ祈禱を上ぐ。

戸外は風劇し。

少女。ラ　イラアハ　イイル　アルラア！

青年。ユウセフ(遽たゞしく入り來る)。熱風がやつて來たぞ！フランス人は何處にゐる？

少女。もう直來るわ！

青年。お前なぜ一思ひに、彼奴を刺し殺してしまはなかつたのだ？

少女。いいえ、いいえ！彼奴は自分で自分を殺すやうにするのですよ！若しかあたしが自分でそんなことをしやうものなら、白人はきつとあたし達の同族を鏖殺にするに違ひない。何故といつて彼奴等はあたし

が少女のビスクラだといふことは知らないでも、あたしが道案内のアリだといふことは知つてゐるのだから。

青年。彼奴が自分で自分を殺すやうにする？どうしてさうするのだい？

少女。お前さん知らないの。この沙漠の熱風に逢へば白人の腦漿は棕櫚の實のやうに干乾びてしまふのだよ。そしてさまざまな怖ろしいものが眼の前に現はれて、もう一刻も生きてゐる空はなく、つひにはあの誰も知らない大きな世界へ逃げて行かなくてはならない

やうになるのだよ。

青年。そんなことも聞いたことがある。なるほどこの前の戰の時にも六人のフランス人はまだ戰場に行き着かぬうち、我と我が手で生命を斷つた。だがお前今日の熱風を當てにするなよ、何故といつて山の上にはもう雪が降つてゐるし、半時間絶たぬ中にみんな止んでしまひさうだから。——ビスクラ！、お前まだ彼奴を怨みに思つてゐるのかい？

少女。まだ怨みに思つてゐるかつて？——あたしの怨みは沙漠のやうに果てもない、太陽のやうに燃え盛つ

て、そしてあたしの此愛情よりまだ強いのだよ！彼奴等がアリを慘たらしう斬殺して、あたしの快樂を奪つて行つた時から一刻一刻、怨めしいと思ふあたしの一念は、ちやうど蝮の齒に毒のたまるやうに積つて來た。あの熱風に出來ないこともあたしはやつて見せるつもりなのだよ。

青年。よく言つたビスクラ、きつとやるがいい。だがおれの怨念はお前を一目見た時から、いつか秋に逢つたアルフア草のやうに萎んでしまつた。力は俺が貸してやる。お前は矢になつて、おれといふ弓にかかるがよい。

少女。ユウセフ、あたしを抱いておくれ！さあ抱いておくれ！

青年。いけない、ここは神樣のゐらつしやる前だ、今はいけない——後で、ね、後で！お前が手柄をしとげた褒美にとつて置く！

少女。まあ高慢らしいお頭さん、威張つてゐるわね！

青年。まあさ——お前もおれの胤を胸の下へ宿さねばならぬ少女ぢやないか、その名譽に相應した手柄を見せて貰ひたい。

少女。さうだ、あたしが――外の女ぢやない、このあたしがユウセフの胤を宿すのだわ！あたしは、このビスクラは――このやうに卑しい身分の、醜い女よ。けれども強い女なのだわ。

青年。さうださうだ！どれ、おれはこれから下へ下りて泉の傍で午睡でもしやうか！――それはさうと、それお前が僧院の大司祭様から教はつて、小供の時から市場で鍛えたあの祕術は、今更おれから習ふことは要るまいな？

少女。要らないとも！――臆病なフランス人を嚇かして、

おびえ死に死なせる位な祕術なら何でも知つてゐるわ。敵の傍へ匐ひ寄つて來て、そつと彈丸を射るやうな臆病者が何だらう。あたしは何でも知つてゐるわ――腹話術までも知つてゐる。それでまだあたしの力で、出來ないことがあつたら、あとはお日様がやつて下さるわ。お日様はユウセフとビスクラの味方なのだもの。

青年。さうよ、お日様はマホメット教徒の味方だ。だがうつかりお日様に賴りすぎると、お前自分も燒け死んでしまはうぜ？まあ水の一杯も飲むがいい、かう

見てると、お前の手が干乾びて皺が寄つて來たぢやないか。それに――（毛氈を上げ下に下り行き、一盤の水を汲み來りてピスクラに與ふ）。

少女（水盤を口に宛つ）。――それにあたしの眼には、もう赤いものが見えだした――あたしの肺は燒けるやうだ――聞こえる――聞こえる――あれごらんよ、砂がもう屋根から這入つて來た――それから六絃琴の絃が歌を唱つてゐる――熱風が來たのだ！けれどフランス人はまだ來ない。

青年。さあピスクラ、下へ行かう、フランス人の奴自分

で勝手に死ばるがいい！

少女。いいえ、最初にまづ地獄の責苦をくれて、それからゆつくり殺すのよ！どうぞ、あたしそれを爲ないだらうと思つて！（水を盛砂の上に注いでしまふ）。かうして砂に水をかけて置くの、さうすると復讐の念がだんだん大きくなるの！そしてこのあたしの心臓は干乾びてしまふの。さあ、怨よ、怨よ、大きくなれ、日よ、日よ、燃えろ。風よ、風よ、息を止めろ！

青年。ゐらいぞ、復讐者。ユウセフ第二世のお母様、ユウセフの息子はお前の腹から生まれるのだぞ！いい

かい！

（風劇しくなる。扉に垂れたる帷幕ヒラ〳〵と飜へる。赤き光パッと四邊を照らす、その中次第に黄色に變り行く）。

少女。フランス人が來た、そして――熱風はもう來てゐる！――さあ！

青年。半時間經たない中におれはまた來るよ！あすこにあれ砂時計がある。（盛砂を指し示す）。神樣は異端の不信心者を地獄に墮す時間をご自分で測つて下さるのだ！（去る）。

第二景

（ピスクラ。中尉ギイマアル、顏色青ざめ騰亂してよろけ乍ら出で來る。息も絶え絶えに語る）。

士官。熱風が來た！――おれの部下はどこへ行つたか、お前知つてるだらうな？

少女。あなたの部下は西の方で東の方へ案内してあげましたよ。

士官。西の方で――東の方へ！――はてな！――東の方へ、それはいい、それから――西の方へ！――おれを椅子に掛けさせてくれ、それから水を呉れ！

少女（士官を砂山の上に連れ行き、地上に坐らせ、頭を盛砂の上に着く）。いい工合でせう？

士官(少女を見る)。少し身體が彎つてゐるやうだ。何か頭の下へかつてくれないか。

少女(砂を男の頭の下に盛り上ぐ)。さあこれで頭に枕が出來たでせう。

士官。頭に？でもまだ足がある！——そこに足がありやしないか？

少女。そりやあ極つてるわ！

士官。おれもさう思つた！——さあ脚掛をかつてくれ——頭の下へ！

少女(蘆蓆を曳きずりよせ、士官の膝の下にかひやる)。さあこれ

で脚掛が出來たわ！

士官。それで今度は水だ！——水を呉れないか！

少女(空の盤をとりこれに砂を一杯詰めて士官に渡す)。冷いうちにお上んなさいな。

士官(盤を吸ふ)。冷いな。——だがとても渇きが止まらん。——こりやおれにや飲めん。——おれは水は嫌ひだ。——持つて行つてくれ！

少女。おや犬が來たわ、あなたに咬み付く犬が來たわ！

士官。どんな犬だ？おれはまだ犬に咬まれたことはなかつた！

少女。あなたの記憶を熱風が枯らしてしまつたのよ――熱風の幽靈に取憑かれないやうに御用心なさいまし。ほらこの前バベルケエドで獵のあつた時、氣違ひの獵犬があなたに咬み附いたでせう、あれを覺えてゐて。

士官。バベルケエドの獵の時！ああさうだ！――あれはたしか獺色の牝？――

少女。牝犬と仰しやるの？ええ、さう！ねえ！それがあなたの腓腸の處を嚙んだのよ！その傷がちくちく痛みはしなくつて？

士官（腓腸を掴まんとして蘆薈に手を刺す）。やはり、痛いな！――水だ水だ！

少女（砂を盛れる盤を與ふ）。さあお上がんなさい！

士官。いかん、どうも飲めない！おお、助け給へ、聖マリア、おれは恐水病になつた。

少女。心配することはありませんわ。あたしあなたの病を直して上げませう、音樂の功力で惡魔を拂つて上げませう！さ、聞いてゐるのよ！

士官（叫ぶ）。アリ！アリ！音樂はいけない！おれには辛抱が出來ない！それにそんなものが何の役に立つもの

ぢやない！

少女。音樂といふものは毒々しい蛇の心をさへ和げるといふのに、氣違ひの犬を抑え付けるくらゐ何でもないのですよ！まあ聞いてゐらつしやい！（六絃琴に合せて歌ふ）。ビスクラービスクラ、ビスクラービスクラ、ビスクラービスクラ。熱風！熱風！

青年（ユウセフ地の底より）。熱風！熱風！

士官。アリ！何をお前歌つたのだい？

少女。あたしが歌つたんですつて？ほら、今度は椰子の葉を口に當てるんですよ！（椰子の葉を一枚齒の間に當

つ。地の上にて歌ふ）。ビスクラービスクラ、ビスクラービスクラ、ビスクラービスクラ。

青年（地の底より歌ふ）。熱風！熱風！

士官。なんといふ地獄の魔法だらう！

少女。さあ歌ひますよ！

少女及び青年（聲を合せて）。ビスクラービスクラ、ビスクラービスクラ、ビスクラービスクラ！熱風！

士官（起上る）。お前は二つの聲で歌つてゐる、惡魔、お前は誰だ！お前は男なのか、女なのか？それとも兩方なのか？

少女。あたしはアリですよ、道案内のアリですよ！あなたは感覚が狂つてゐるものだから、もうあたしが分からないのね、けれどあなたが若し感覚や心の迷からご自分を救はうと思ふなら、あたしのいふことを信じるのよ、あたしが言つたり爲たりすることや、あたしが命令することを信じるのですよ。

士官。そんなことをお前言ふまでもないわ。何故といつてお前のいふことは、何んでもそのとほりになるのだからな！

少女。ほら見ろ、偶像信者奴！

士官。偶像信者？

少女。ええさう！あなたが懐に入れてゐる偶像をお出しなさい！

（士官肌守の像を取出す）。

少女。それを足で踏むのですよ、そしてあの唯つたお一方の大慈大悲の神様のお名を呼ぶのです。

士官（躊躇しつゝ）。おれの守り本尊の聖エヅアルドをかい。

少女。それがあなたを守つてゐるの？守ることができるの？

士官。いや、できない！——（覺醒す）。いや、できるぞ！

少女。ぢやあ見ていらつしやい！（扉を開く、帷幕飜り、草も動く）。

士官（口を抑ゆ）。扉を締めて！

少女。偶像と一所に倒れてお了い！

士官。いんや、できない。

少女。ほらごらん、熱風は髪一筋あたしを傷めやしない、けれどお前のやうな異端の不信者を殺して了ふのだ！偶像と一所に倒れてお了い！

士官（肌守の像を地面に投げ付く）。水を呉れ！死ぬ死ぬ！

少女。唯お一方の大慈大悲の神様にお願ひ申すがよい！

士官。何をお願ひ申すのだ？

少女。あたしの言ふとほりに言ふのよ！

士官。言つてごらん！

少女。神様は唯お一方ぢや、あの大慈大悲の神様を離れて外に神様はないのぢや！

士官。神様は唯お一方ぢや、あの大慈大悲の神様を離れて外に神様はないのぢや！

少女。地面の上に横に成るのですよ！

（士官厭々横に成る）。

少女。何か聞こえて？

士官。泉のさら〳〵いふ音がする。

少女。よござんすか！神様は唯お一方ですよ、そしてあの大慈大悲の神様を離れて外に神様はないのですよ！――何か見えて？

士官。泉がさら〳〵いふのが見える――ラムプの輝やいてゐるのが聞こえる――緑の枠のついた窓に――白い街道に。

少女。窓の傍に誰か居るの？

士官。わたしの妻だ――エリイゼだ！

少女。窓帷の蔭に立つて、あの女の頸に手をかけてゐる

のは誰？――

士官。ありやあわたしの忰だ――ジョルジだ！

少女。あなたの息子つて幾歳になるの？

士官。聖ニコラスのお祭でちやうど四歳になる！

少女。それでも、もう窓帷の蔭に立つて、他人の奥さんの頸なんか抱いてゐるの？

士官。あれにそんな事はできない――だがあれに違ひない！

少女。四歳だといふに、赤い口髭なんか生やしてゐるの

士官。赤い髭だと！ああ、それぢやあ――友達のジュウルだ！

少女。窓帷の蔭に立つて、奥さんの頸に手をかけてゐるのがさうなのねえ！

士官。あつ、畜生！

少女。あなたの息子さんが見えて？

士官。いんや、もうゐない！

少女（六絃琴で鐘の音を眞似る）。今度は何が見えて？

士官。鐘の音が見える――それから死骸の臭ひがする――口の中で腐つた乳酪のやうな臭ひがする――ベッ！

少女。副牧師が小供の死骸を墓に送る歌が聞こえやしないの？

士官。はてな！――おれには聞こえない――（愁はしげに）。けれどお前それを望むのだな？――さうだ――今度は聞こえた！

少女。あの中に擔いで行く棺の上に花束が見えて？

士官。ああ……

少女。それに菫いろのリボンが付いてゐる――そしてその上に銀文字で彫つてある――「わが愛しいジョルジよ、さらば！――汝の父より」と。

士官。さうだ、さう書いてある！――（泣く）。わたしのジョルジや！ジョルジや！一番可哀い兒よ！――エリイゼや、お前わたくしを慰めておくれ！――わたしを助けて！（そこらを捜索す）。お前何處にゐるのだ？エリイゼや！お前もわたしを見棄てて行つたのかい？返事をしてくれ！お前の戀しい夫の名を呼んでくれ！

聲（天井より）。ジュウル！ジュウル！

士官。え、ジュウル！おれの名は、さう――なんといつたけ、おれは？――シャルルと云ふのだ！――それだのにあの女はジュウルといつた！――エリイゼや

――可哀いいエリイゼや――返事をしてくれ、何故といつてお前の靈魂はここに在るのぢやないか――わたしには分かつてゐる――それにお前わたしに約束したらう、決して外の男を愛しはしないと……

……（聲、笑ふ）。

士官。誰だ笑ふのは？

少女。エリイゼよ！あなたの奥さん！

士官。殺してくれ！――もう生きてゐたくはないわ！生きてゐるといふことが、サンヅウでいためた漬菜のやうに、嘔吐が出るほどいやだ――おい、お前サン

ヅゥつてなんだか知つてるか？豚の脂だわ！（唾を吐く）。もう唾も出ない――水だ！水だ！おい、呉れなきや咬み付くぞ！（戸外に劇しき暴風の音）。

少女（口を抑へて咳す）。さあ、フランス人、これでお前は死ぬんだよ。かうやつてゐるひまに、最後の遺言でも書くがいい！――手帳は何處へやつたの？

士官（手帳とペンを取り出す）。なんと書くのだ？

少女。男といふものは、死ぬ間際になると、女房のことを考へたり――それから子供のことを考へたりするものだねえ！

士官（書く）。「エリイゼよ――余はおん身を呪ふ！――熱風――余は死せんとす……」

少女。それが濟んだら署名をするのよ、署名の無い遺言狀は無效なのだから！

士官。どういふ風にすりやあいいのだ？

少女。かう書くの。「ラ　イラアハ　イルアルラア」と。

士官（書く）。さあ書いた！これでもう、死んでもいいのか？

少女。ええ、もういいの、部下を見棄てた臆病な軍人として死んでもいいの！――でもお葬ひは立派にして

あげるわ。お前さんの死骸を埋める時には、狼共がお吊ひの歌を歌つてくれるだらう！（六絃琴で突貫の太鼓の音を眞似る）。ほらお聞きよ、突貫の太鼓が鳴つてゐる――突貫の太鼓が――太陽や熱風を味方にした不信者共を、伏兵から驅り出す太鼓の音だ――（六絃琴を打つ）。一齊射撃を食つた。――フランス兵はもう彈丸を塡めることもならない――アラビア兵は盲めつぱうに射撃してゐる――あれフランス兵が逃げ出した！……

士官（身を起す）。フランス兵は逃げやしないぞ！

少女（笛を取り出して退却の譜を吹く）。退軍の譜を吹いてゐるから、フランス兵は逃げるのよ！

士官。ああ退却する――ありや退軍の譜だ――だがおれは爰にゐる――（肩章を拶り取る）。おれはもう死んだのだ！（地上に倒る）。

少女。ああ、もう死んでゐるのだよ！――お前さんはとうに死んでゐることを、自分でしらないのだよ！――（納骨堂に行き、髑髏を一個取り出す）。

士官。おれはもう死んだのか？（顏を抑ふ）。

少女。とうにさ！――とうにさ！――ほらこの鏡をのぞ

いてごらん！（髑髏を示す）。

士官。ああ！それはおれだな！

少女。それ、お前さんのとんがらかつた頰骨が見えないかい。――兀鷹がお前さんの眼玉を喰べてしまつたのが見えないかい。お前さん、自分で拔かせた右の奥歯の洞穴に覺えはないかい――それから頤の邊の笑靨の所に小さな虎髯が奇れいに生えてゐて、お前さんの奥さんのエリイゼがよく撫でた、それが見えないかい――それからこれが耳のあつた邊、お前さんの子息のジョルジが毎朝珈琲を飲む時にいつも接吻

したところだよ。――それからほら、ここに頸のところに斧が打ち込んであるだらう――監守が脫走兵を殺す時にやつたのだよ！……

（士官驚愕の眼を瞪りて聞きゐたるが、こゝに至りて息絶えて地上に倒る）。

少女（膝づきゐたるが、死人の脈を檢し了りて立上り、歌ふ）。熱風！熱風！（扉を開く、絨氈飜る。口を抑へて仰向けに倒る）。ユウセフ！

第三景

（前景の人々。青年ユウセフ窖より出で來る）。

青年(士官を檢し、少女を探す)。ビスクラ！(少女を見付け、兩手に抱き上ぐ)。生きてゐたか？

少女。フランスの奴は死んで？

青年。まだ死に切らないにしても、おつつけ死ばるわ！

熱風、熱風！

少女。ぢやああたしは生きたのねえ！まあ水を頂戴な！

青年(明り窓の方へ伴ひ行く)。さあ！――今こそユウセフはお前のものだ！

少女。そしてこのビスクラはあなたの息子の母さんになるのだわね！ユウセフ、ユウセフは偉い男よ！

青年。ビスクラは強い女だ！熱風よりも強い女だ！

――(をはり)――

大正二年三月五日印刷
大正二年三月十五日發行

近代脚本叢書
第貳篇
運命の人

著譯者　楠山正雄

發行者　東京市神田區南神保町拾四番地　鶴岡五郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　荻原勝次郎

定價金四拾錢

發行所　東京神田區南神保町十四番地　現代社
振替口座東京二三八三六

博文館印刷所發行
東京小石川區久堅町一〇八番地

近代脚本叢書

袖珍美版 寫眞裝入

定價金四拾錢 毎冊

毎冊凡三百頁

第壹編 新刊發賣

戀愛三味 シユニツレル作 森鷗外譯

第貳編 新刊發賣

運命の人 ショオ作 楠山正雄譯

ペレアスとメレサント メーテルランク作 島村抱月譯

群盲 メーテルランク作 小山内薫譯

青い鳥 メーテルランク作 若月紫蘭譯

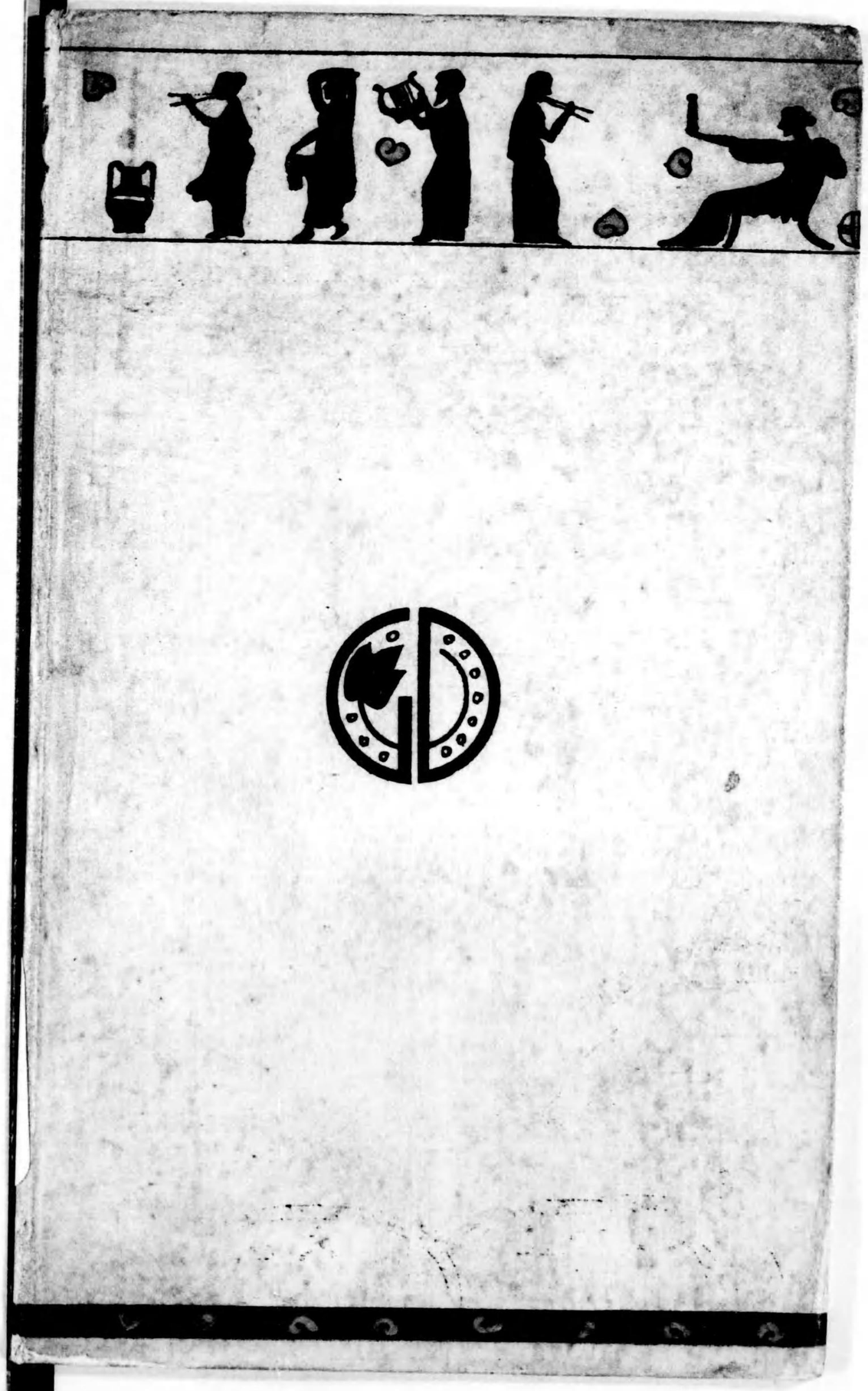
纍者ヘンシエル ハウプトマン作 小野秀雄譯

戀をあさる人 シヨオ作 和辻哲郎譯

海の夫人 イブセン作 草野柴二譯

伯爵令嬢 ストリンドベルク作 島村民藏譯

270
775



終